

---

# 猫又少年の危機感

戸猫又駅長

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猫又少年の危機感

### 【Nコード】

N0914M

### 【作者名】

戸猫又駅長

### 【あらすじ】

ある日、出会った少年と猫又のハチャメチャで非現実的な物語。

## 出会った矢先・・・

ある夜の事だった。

窓から、しょっちゅう猫の鳴き声が五月蠅くてたまらない。

俺、杵柄泰地は今日に限ってイライラすることがたくさんあった。心の整理がつかない。模試の結果はさんざん。友人との仲違いがおきて、本当にイライラしていた。はあ、もう人生にピリオドを打ちたい。

嫌なこと続きだった俺はムシヤクシヤしていたのであろう。俺は勢いよく窓を開け、外で鳴いていた猫を拉致った。

「にゃあ、にゃあ。」そう甘えた声で解放を求める猫をベッドに打ち付け、机の上にあった辞書で殴り殺そうとした。

その時だった。

俺の目の前に青い魔方陣が表れ、辞典を勢いよく吹き飛ばした。一体、何が起こしたんだ。魔方陣の元をたどっていくと・・・。

「ふゝ、危なかった。」

殺そうとした猫が俺が気付かぬうちに魔導士の格好をし、杖をもつて俺の動きを瞬間的に止めた。

「連れ去ったあと直ぐに殺そうとするなんて…。ここまで暴力的になったのか。」

「猫が、喋った…。」

「猫、猫。言わないでくれる？僕は、そこらじゅうにいる猫とは違う。化け猫、猫又なんだ。それに僕にはタマっていう名前があるんだい！おぼえとけ！」

その灰色の猫。タマの言動に腹が立ち、俺はそいつにケンカを売った。

「だったら、その証拠を見せてみる！」

タマはため息をつき、

「せっかく、謝るチャンスをやったのに。まあ、僕の本当の力は実

感してもらわないと。」

と言いながら、杖を天井に向けた。大きな青い魔方陣が表れた。

「魔法よ、解き放て！猫又獣化開始！」

タマが唱えた呪文に反応したそれは、杖で動きを操った。そして、俺に命中した。なんだか身体中が変わっていくような感覚がした。耳は尖り、上へ上へ。尾てい骨のあたりから何かが突き出てきた。一本ではなく、二本……。最後にタマがたちまち青い光に分解され、俺の胸の中に入っていった。こうして俺の獣化がますます進行していった。

青い魔方陣や光が消えた瞬間、自らの身が心配で鏡の前に行った。前より身軽になった割には二本足だと歩きにくい。あれ、僕は人間じゃなかったっけ？それに、いつから一人称が『僕』に変わったのだろう。変な気がかりを持ちながら、鏡の前に立った。そこには僕と同じ動きをするタマの姿があった。鏡に近づいたり遠ざかったり、（前足だというべき）手を使って鏡の向こうに手を振っても、同様の反応をした。同じタイミングで。

所詮、夢だろうと思い頬をつねようとしたが、猫爪で引っ搔いてしまった痛みで夢ではないとわかった。僕があわてふためく中、タマは笑いだした。

“ざまあみろ。”

「何のつもりで僕をこんな目に……。」

“自分の否を認めるんだな！人の面していた化け猫め！”

「ば、化け猫は君じゃないか！僕は悪いことしてなんか……。」

この時、思ったが猫又獣化すると口調が変わることに気が付いた。

次の瞬間、青い鈴つき首輪が僕の首を絞めていった。

“黙れ！何も罪もない奴を殺そうとするなんて、何て最低な野郎だ。少し懲らしめてやらあ！”

「…。」

首を絞められ、言葉が出てこない。死ぬことが目の前に表れた。確かに、ムシヤクシヤしていた。それを抑えるためにタマを殺そうとした。あれが元凶だったとは…。

「ごめんなさい。タマ。だから、もう絞めないで…。」

死にたくない思いが過った。小さなモノにも怨念みたいなものがあったとは…。

“仕方ねえな。俺の本当の力を解ったみたいだしな。”

首輪が一気に緩み、体内から青い光が放出し、本来のタマの姿に構成された。もちろん俺は元通り、人間に戻った。

「本当に猫又にされるかと思った。」

「まあ、人間に知られたら当分は暮らすことになるから、宜しくね。泰地。」

「家族に見つかったらどうするんだ。後が怖えよ。」「僕のような猫又を持っていないと姿は見えないし、声も聞こえないから平気だって！猫アレルギーとかは問題ないから平気だよ！」「あ、そう。」ある意味、タマとの同居を認めることになった。

今、思うとタマが俺の名前を知っていたのは、昔、遊んでいたからだと今更のように思い出した。

しかし、世界が大変な目に遭いそうになっているなんて思いもなかった。

(続)

まさか…の罖？！

「泰地、ダメだよ。暑いからって、アイスばかり食べてちゃ。」

「タマ、少し黙ってよ…。」

「それでも僕は泰地の猫又だよ！」

「はいはい。」

気持ちいいクーラーの風。冷えて甘い棒アイス。杵柄泰地は、ずっとこんな生活、こんな自由を味わいたかった。せつかくの夏休みだから平凡に、気儘に過ごしたかった。すなわち、この時間帯は彼にとって自由であり奇跡だとこの喜びを噛み締めた。タマの説教攻撃を除けば…。

“おお、神よ。ずっとこのような生活を私にお恵みください！”  
暑さのせいだろう。怠けたい気持ちが強まって、勉強など勉める気持ちなど何処かへ消え去ったらしい。

R R R R R

突然、家の電話が鳴り出した。

「ちえ、誰だよ。こんなときに…。」

僕はある事件から電話に出るのが億劫になったが、今は誰も居ないので仕方無く電話に出ようとした。

「泰地、出ない方がいいよ。」

「だっ、誰もいないし、出なきゃいけないだろ。」

「ま、まさか、彼女？」

「違うわ〜！」

コントをやっている場合ではない。早くでなくては…。

「もしもし。」

『あの、山川さんのお宅ですか？』

出たあゝ。いつもいつも間違い電話をする人…。この前なんかは間違いFAXも届いてたし…。まさか、死んだ父さんが言ってた詐欺グループの…。家に帰るのも怖くなったのは、この一件のせいなのだ。

「いいえ違います。何度、同じ間違いを繰り返せば気がすむんですか。もうかけないで下さい。さよなら。」

僕はよく声を振り絞って答えた。偉い！つてか、お前はいったい誰だ？本当は何の用なんだ？怖い気持ちを抱えたまま切ろうとした。

『調子乗んなデメエー！』

なぜか、相手が逆ギレしてきた。

『オイ！今、切ってみろや。そしたら、お前の自由なんぞ容易く奪えるんだぜ！』

「いつ、一体、何の権利があつて…」

背後と電話から、僕を威圧感が襲った…。

『「さあ、俺の言うことを聞け。早く、外へ出る。」』

男は冷めた口調で、僕を脅した。

“た、大変だ。殺される…。怖い！死にたくないっ！”

命を護るべく、僕は指示に従った。

「いいガキじゃねえか。現代のガキは、言うことを聞かねえから、直ぐに殺っちまう。」

“まっ、まさか… マファイア？！殺人鬼？！”

そう考えてるうちに、僕は脱出を試みた。男が怯む隙にとにかく家から逃げた。

怖い、怖い、怖い。

全力で走っていると、泰地の体力じゃ疲れてくる。少し太った体

質だと限界なのかもしれない。

逃げなきゃいけないのに、俺は地面に倒れ伏せた…。黒い車が泰地の身体の近くに止まった。さっきの男がでてきた。手にはスタンガンがある。必死の逃亡、最後の匍匐前進も虚しく泰地の首にスタンガンが当てられた。

「うつ、…。」

「手をかかせやがって。さあ、こいつをあのお方に献上しなければな。」

男は、泰地を袋で覆いトランクに入れた。

車が発進したとたん。異次元空間が飛び出し、そこに突っ込んでいった。

聞けば分かる通り、泰地は国内某所のある山奥の施設らしき建物に拉致された…。

そこには、跡形もなく、その事実があったことは誰の記憶からも消されていた。



ね、猫又に？

「…きて、起きて。」

泰地は気がついた。傍に居たのはやっぱりタマだった。

「あつ、起きた！」

「あれ…、ここは？」

辺りを見回すと、牢の中に入れられていた。暗くて周りの様子が分からない。

「良かった。気が付いて。てっきり死んじゃったかと思って…。」

「勝手に人を殺すな。」

牢中に足音が響いてきた。そして、泰地の前に止まった。タマは怯えて泰地の後ろにくっついていている。

「起きたか、猫又の魔導士よ。」

「だ、誰だ。俺をここに連れてきた理由は何だ。」

「猫又の魔導士よ、君には関係がないことさ。フッフ、私は遂に全員を見つけた。我が僮を、猫又を、猫人を！」

“この人は、何を言っているんだ？”

謎の人物の話がよく理解できない泰地である。

「さあ、猫又の魔導士よ。早く覚醒するんだ。」

「ちよつとちよつと、俺は人間であつて動物じゃないんだって」

「分からないやつだ。お前は我が僮によって猫又になったということがまだ気付かないのか。」

「タマ、まさか。」

タマは泰地に顔を叛けたままだった。そしてタマの目から涙が出た。

「…。」

「よくやった、我が僮よ。さあ、こいつを猫又の魔導士にするんだ。私の言うことを聞け！」

泰地は、

「誰が身体を売るもんか。」

と答えた。タマは依然、俯いたままだ。

「聞かぬなら…。」

謎の人物の右手から紐が飛び出した。泰地の身体が締められる。

「く、苦しい…。」

「お前は人間ではない。猫又という妖怪の化身なのだ。生まれるときに、記憶を無くしているだけだ。」

「俺は…、そんなもの信じない。」

「猫又獣化、開始。」

男は非情にも獣化のスイッチを入れた。タマは光で首輪に再構成された。

「うわああああああああああああああああっ！」  
前に起こったような感覚が泰地を襲った。

「うにゃあ！」

泰地は真正正銘の『猫又の魔導士』となった拍子にそのまま倒れた。  
「猫又の魔導士よ。君の猫又獣化は素晴らしい。さあ、暴走しないように牢の中でじっとしてくれ。」

意識が遠退く、自分がどうなったかまだ、はっきりとは分からなかった。

## 出会った仲間？！

泰地がふと目を覚ました。

「夢？」

そう思ったかった。不法侵入による拉致、異次元空間への移動。身におきた獣化現象。あるはずがない。しかし、現実には壮絶なものだった。

「嘘だ……」

鏡を見ると、体は元の太った体型は維持されるものの、灰色の獣毛が生え、立派な猫、いや、猫又になっていた。服は魔法使いのようなものだ。あの男が言ってた、『猫又魔導士』になったのでは……。

ポカツ。

「痛っ！」

タマは叩かれた。

「貴様は誰だ。」

声がした方を向くと、一人の猫又がタマを見ていた。そいつは、毛が白い割には法師様が着るような服で身を纏っていた。

「ね、猫又魔導士のタマ。」

タマはそう答えた。

「ここに来たってことは、元人間か？」

「え？う、うん……」

白猫又は、安堵の表情を見せた。

「そうか。俺は、猫又法師のシロ。同じく元人間。」

「えっ？人間なの？」

「まあ、ここにいる猫又はみんな同い年ぐらいだからな。」

「そう。」

話しているうちにほかの猫又が起きてきた。

「あれ、初めてみる顔だな。あつ、新入りかあ。」

白衣を着た黒猫又が言った。

「クロ、いつ起きたんだ。タマがびっくりするだろ。」

「わりいな。おゝす、タマ。俺は猫又化学者のクロ。種族は化学だ。」

「

「はっ、はい。」

「クロさゝん。」

一気に五人が現れた。

・ 袴姿の虎猫又

・ 自然で作ったの服を着た斑猫又

・ 西部劇のガンマンのような山猫又

・ 忍び姿の三毛猫又

・ 鉄の鎧を身につけた藍猫又

五人ともあまり笑ってはいなかった。クロに朝早く起こされたのだから笑えるはずがない。

「待たせたな。タマ、紹介するな。左から順に猫又剣士のトラ、猫又環境長のブチ、猫又銃士のヤマ、猫又忍者のミケ、猫又管理人のネビだ。」

「は、はじめまして。猫又魔導士のタマです。」

こんな感じで猫（又）の集会が終わった。

『起床！起床！』

突然、スピーカーから声が鳴り響いた。自分たちの能力で人間の身体に化け始めた。あの時の同じように光を伴い変化していった。

「よし、完了！」

クロが人間になった。

「スゲー。」

感嘆している場合ではない。タマも泰地に化けなければならなくな

った。

タマは自分に杖を向け、人化けの呪文を唱えた。すると、青白い光がタマを覆い始めた。尻尾が段々縮んでいくのが感じられた。

「あつ、できた。」

タマから泰地に変わった瞬間だった。

「タマ、もう学校に行くよ。」

「学校？」

泰地は訳も分からず、すぐに、用意されていた制服に着替え、猫又たちと学校へと向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0914m/>

---

猫又少年の危機感

2010年10月16日08時15分発行